沖縄県立看護大学
沖縄でグローカルに国際保健看護を学ぼう！

沖縄県立看護大学　地域保健看護　准教授
知念　真樹

1997年から沖縄県保健師、離島駐在、健康づくり、結核、母子難病等に従事。2016年から沖縄県立看護大学で地域保健（公衆衛生）看護と国際保健看護を担当。

沖縄県立看護大学について

沖縄県立看護大学は、看護系の単科大学として 1999 年に開学し、今年 23 年目を迎えます。2004 年には大学院保健看護学研究科保健看護学専攻博士前期課程・後期課程も開設されました。学部学生の多くは、卒業後、沖縄県内の病院や市町村に看護職として就職しています。本学の教育理念の一つに、「人間のおかれた地理的文化的特性を理解し、地域に根ざした保健看護活動ができる能力を養うとともに、国際的視野で保健看護活動ができる能力を養う。」という文言があります。本学では、その理念を踏まえて、学部 4 年次の必修科目として、23 回シリーズの「国際保健看護」の講義・演習を展開しています。また、今年の 1 年次から始まる新カリキュラムでは、島嶼国際保健看護実習が開始されました。いずれの科目でも、異文化理解とグローカル（国際的視野で保健活動ができる）をキーワードに講義・実習が展開されています。

沖縄の外国人の状況

皆さんは、沖縄について、どのようなイメージをお持ちでしょうか。沖縄は、観光地なので日本本土からだけでなく、海外からも観光客が訪れます。令和 4 年の沖縄県勢要覧 1) によると、沖縄への入域外国人の総数は約 18 万人で、その 94.45% は台湾や香港などアジアの方々です（図 1）。　一方、沖縄に住んでいる外国人（在留外国人）の人数は、18,535 人（2021 年 12 月末現在）で、沖縄県の人口（1,459,866 人（令和 3 年 10 月 1 日現在））の約 1.6％を占めています。日本の在留外国人の上位 5 か国は、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、ブラジルですが、沖縄はベトナム、米国、中国、フィリピン、ネパールと少し違いがあります（表 1）。沖縄は米軍基地があることでも有名ですが、この在留外国人の人口には米軍基地の軍人やその家族は含まれません。平成 23 年 6 月時点の沖縄県の資料 2) では、約 4.7 万人との報告があるので、実際のところ最も多いのは米国人になると思われます。

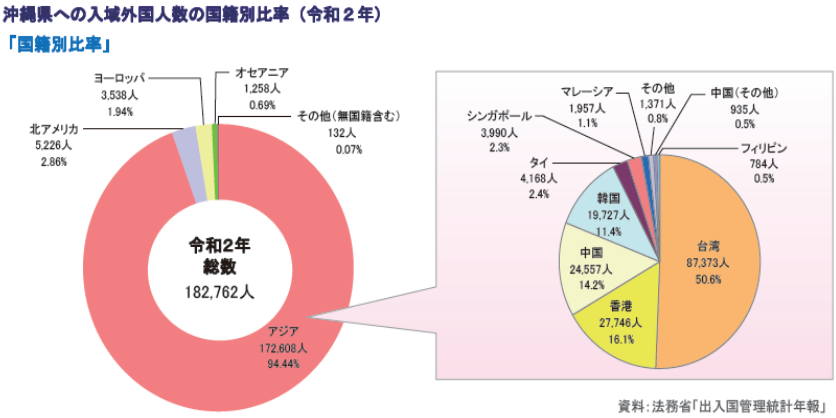

図1　沖縄県への入域外国人数の国籍別比率（令和2年）
出展）令和4年沖縄県勢要覧　みえる・わかる・おきなわ　p9　https://www.pref.okinawa.jp/toukeika/youran/R04/R04youran.pdf

表1　在留外国人の国別人数（全国と沖縄県）

全国	人	%	沖縄県	人	%
1位　中国	716, 606	26. 0	ベトナム	2, 622	14. 1
2位　ベトナム	432, 934	15. 7	米国	2, 518	13. 6
3位　韓国	409, 855	14. 8	中国	2, 461	13. 3
4位　フィリピン	276, 615	10. 0	フィリピン	2, 206	11. 9
5位　ブラジル	204, 879	7. 4	ネパール	1, 885	10. 2
6位　ネパール	97, 109	3. 5	韓国	1, 243	6. 7
7位　インドネシア	59, 820	2. 2	インドネシア	890	4. 8
8位　米国	54, 162	2. 0	台湾	709	3. 8
9位　台湾	51, 191	1. 9	ブラジル	642	3. 5
10位　タイ	50, 324	1. 8	インド	338	1. 8
その他	407, 140	14. 7	その他	3, 021	16. 3
総計	2, 760, 635		総計	18, 535	

出展）法務省「在留外国人統計2021年12月末」を基に知念が作成

異文化理解を深める工夫

将来、看護職になる学生たちにとって、このような沖縄の地域性も踏まえた異文化理解や異文化コミュニケーションはとても重要だと考えています。しかし、学生が、将来自分が病院や地域で外国人の対応をする可能性をイメージすることは難しいため、講義のなかで実際に起こった県内の事例を紹介しています。例えば、観光で来沖した台湾人の妊婦さんが、切迫早産になり県内の病院で出産することになった事例や、日本語学校の学生（ネパール人）が結核を発症し、そこから集団感染がおこった事例などです。外国人とのコミュニケーションというと、学生はすぐ英語をイメージしますが、沖縄県に来る観光客や在留外国人は、英語が母国語でない方、英語が通じない方も多いということを、まず知ってもらうことが大切だと考えています。また、異文化理解とコミュニケーションを学生に体験してもらうために、日本語学校や OIST（沖縄科学技術大学院大学）の学生と交流する時間を演習や実習の中で設けています。学生は、対象となる日本語学校の学生の母国のことを事前に調べて、その文化や生活習慣、食事、沖縄に来ての生活の変化などを質問したり、お互いで自己紹介しながら沖縄の好きなところを紹介し合います。コミュニケーションは、やさしい日本語や英語、時には翻訳アプリなども活用しながら行っています。学生からは、「（日本語で）わかりやすく説明するのがむずかしい」「（翻訳アプリも使って）とにかく、がんばって伝えようとした」「英語で会話したが質問はできても相手の回答から深めて質問できなかった」などの感想がありました。

グローカルに考える

国際的視野で考え地域で保健活動を行うという意味の「グローカル」という造語は、本学では開学当初から使われていますが、学生にはなじみのない言葉であるため、グローカルのイメージを伝えるために、SDGs を用いて一部の講義を組み立てています。

まず、SDGs が国連で採択された全世界の目標であること、掲げられている目標は、そのどれもが健康とつながっていることを理解してもらうために、「ラクの物語」3) という短いお話を講義のなかで紹介し、それを用いてワークを行います。それと並行して、沖縄の貧困に関連する本を講義の最初にいくつか提示し、その中から一つ選んで中に書かれているお話を一つ読んでくるように課題を出しています。「ラクの物語」も学生が課題として読んできた話も、いずれも「貧困」がキーワードになっています。沖縄県は、全国でも子供の貧困率が高い県ですが、大学に来ている学生の中には、「貧困」という状況が自分たちの身近にあることを実感したり、イメージできない者もいます。「貧困」が遠いどこかの国の問題ではないということ、看護職として医療現場や地域で保健活動を行うときには必ず出会う問題であり、自分たちに出来ることをグループでディスカッションしてもらいます。

最後に、私は、これまでの保健師としての地域活動での体験や、在留外国人の方達たちとの交流のなどから、国際保健は案外身近なものだと学生達に伝えていきたいです。

参考資料

1)令和4年沖縄県勢要覧　みえる・わかる・おきなわ
https://www.pref.okinawa.jp/toukeika/youran/R04/R04youran.pdf

2)https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/kichitai/documents/02kitinogaikyou02beigunnkiti1-7.pdf

3)「ラクのものがたり」　デイヴィッド・ワーナー、デイヴィッド・サンダース、池住義憲、若井晋監訳　いのち・開発・NGO　p61-63　新評論　2006年第8刷

日本語学校の学生の皆さんへインタビュー

フォトボイスで異文化理解